

米国における

ACEI 一九五七年度研究大会報告

黒田成子

例年この誌上で紹介しているACEI（国際児童教育協会）について、本年も、ACEI機関誌の五月号を参考にして、報告をしたいと思う。何らかの示唆になれば幸いである。

この会は、本年は、加州、ロスアンゼルス市において、四月二十一日から二十六日まで、米国全土と世界の十三か国から、総計千六百十五人の参加者があった。テーマは「すべての子どもたちが学ぶことのできるように」であった。

会期の中心は、何と言っても、研究討議の行われた第三日目と四日目である。

参加者は四つの大きい班に分れ、それらがさらに、五十六の小グループに分れた。この討議において、既成の解決法をそっくりもらって帰ろうとするような態度の者は誰にも見受けられず、むしろ、互に意見をブールし合って熱心に討議をした。

第一班 子どもへの理解を深めるため この班は十七の小グループに分れた。大部分のグループは、まず、子どもを理解す

るてだてとして、子どもは、いかに学習し、成長し発達するかという問題に関して、各自の日頃の研究を持ちよって、さらにこれについて討議した。

あるグループでは、子どもが、ものをおぼえるに当って、競争心をかりたてる必要が要素であるかどうかという問題が論ぜられたが、純粋な学習のためには、結局、これは、不必要であり、たいして価値がないということになった。

また、あるグループでは、身体障害者や、記憶力の鈍い児童に関しては、カリキュラムの目的や目標を普通児と同じにおくけれど、どちらかといえば、職業教育や、社会教育に重点がおかれなければならないということが強調された。そして、こういう級の指導に当るのは、特別な訓練をうけた教師であること、又何よりもこういう障害のある子どもを受入れる雰囲気が必要であることが取り上げられた。

一つのグループでは、教師の仕事が、単に勉強を教えることにとどまらず、子ども

の教育や健康に関する資料を集め、これを解釈し、家庭や学校や地域社会における人々が、その子どもを理解できるように、援助を与える義務があると言っている。すなわち、そうすることによって子どもの私生活、社会生活における適応をスムーズにさせ、ひいてはその子どもが、将来自重生活、法律を守る市民になるというのである。

他のグループでは、米国独特の問題として、近時国内で住居をかえる者が、非常に多いということが取り上げられた。約五人の子どものうち一人は他の地方へ移転して行く現状である。この場合、転校をスムーズにさせるため、教育的見地から、子どもについての行きとどいた記録が、ぜひ必要である。もちろん、家族との面接も重要な資料となるが、このことに関して、子どもが、教師と父兄が、自分についてどういうことを話してほしいか、子ども自身に意見を言わせれば、子どもは自分で自分を評価し、安定感を得るであろうと提唱する者もあった。

第二班 教科の学習に当って高い標準を得るために

この班では、加州、サクラメント州の教育委員、ヘファナン女史がまず、講演を行った。昔の三R「読み、書き、算数」を子どもたちにみっちり仕込むという考え方があるが、これを貧しい小屋にたとえ、意義や内容のある今日の教育を壮麗な大建築物にたとえた。へ女史は、この建物は三Rとは限らず、体育、音楽、文学、発明、商業美術等、ありとあらゆるものを含み、これらが、単なる勉強だけにとどまらず、これらが、どういう内容をもって、どのように人間生活に関連を持っているかという点に力がそそがれていることの意義を説いた。勉強は単に一つの教科を孤立させておぼえるのではなく、あの問題解決のため、経験を通しておぼえるのであると説明した。

この班は十四のグループにわかれ、それぞれ特色のある討議がなされた。

リーディングは、小学校一年生から始め

るのが常識であるが、あるグループでは、この問題について、三年生から始めることも効果的であるという結論に達した。これには、こういう指導方法に対して、理解と信念をもってしている教師が必要である。いったい子どもの本についてテストを行ってみると、自由に与えるよりも適当に選択された本を与える方が、ずっと、リーディングの程度が進歩する事実が示されている。一週間のリーディングの時間のうち、一日か二日は特に書に書くことに集申し、先生が一人一人の子どもの手をとって教えることが大切である点と、もう一つ、小、中、高等学校を通して、リーディングのテクニクについて、継続性を持たせることが重要であるとされた。

ある小学校では、国語の英語の他に、外国語が教えられているところがある。これは、外国語に対するゆたかな思想や、洞察力を持たせることにより、コミュニケーションや表現力を豊富にする目的を持つと考えられた。

教科に関して、基本的な勉強は、ぜひ必要ではあるが、これは単に三Rにとどまらず、三C (Comprehension, creativity, communication) によって意味づけねばならないとされた。すなわち、現代の文化の中に住む子どもたちは、さらに知識と人を理解し、創造をなし、コミュニケーションでできる子どもにならなければならないというのである。

第三班 よい人間関係を持つことの重要性

近頃「人間関係」ということがよく言われるようになったが、これは大変重要なことである。ケベルスは達者な説書家であったし、ヒトラーは名政治家であった。しかし、技術がすぐれているだけでは不十分であった。世の中の困難はすべて、人間関係の失敗から原因している、とも言える。

あるグループでは、よい人間関係はどういうところから培われるであろうかということが話し合われた。そして、親しい友だち関係、個人に対する尊重、自由なコミュ

ニケーション、受け入れられているという思い……などがあげられた。

一つのグループでは、人間の乳幼児期は、非常に長いものであり、文字通り、庇護を受ける時代であること、この時代に子どもを取り巻く両親、教師、隣人たちの影響がどんなに大きいかということが話し合われた。事実子どもたちは、勉強するという形ではなく、むしろ、文化を受容するという形でおとなたちのことば、価値感、技能などを感じとっていくのである。

他のグループでは、教師の自己満足的な態度を反省している。すなわち、私たち人間は、思惟し、創作し、知性によって生活をかえていく特権を与えられているのに、教育ということについては、あまり深く考えていないようである。いったい子どもたちを年齢別にするのに、一か年で区切るのとが、かならずしもよいことであろうか、平等を唱えながら、グループビンゴ、設定クラス、評価、採点、などの美名にかくれて不平等を行っていないだろうか。一人の子

どもを他の子どもと比較しながら欠点を探すのが正しい教育であろうか。家庭への連絡や報告が、よくなされているだろうか。など反省すべき点があげられた。

しつけということについては、しばしば、取り上げられるが、解決のむずかしい問題であることが認められた。あるグループでは、しつけの中では、自分で自分自身をしつけることが、もっともよい方法である。そのために、子どもたちの周囲に健全な環境、理解あるおとなたち、民主的な運営を可能にする機会を与えること、そして、その子どもたちの集団で定められたきまりを受入れることができるように誘導することがあげられた。

この班では、道徳教育の問題も取り上げられたが、これは先を急いではできないことで、むしろ、子どもが成熟するにつれて、毎日の生活の中で、じょじょに道徳意識が培われていくのである。そして道徳教育においては、子どもの中に、内心的な力をもたせることと、おとなも生きたよい模

範を示すことと、この二つの事実を両立させることが必要である。また、所属感を持たせること、グループの一員であるという感じ、自分はグループに寄与することができるといふ信念が道徳教育の基礎づけに必須条件であるとしている。何よりも、子どもたちを、問題のある、そのままの人間として受け入れ、気持と、人間一般の成長に対する信頼感とが必要であるとも言っている。そして、人間の成長発達途における子どもの行動に表れる一つ一つの現象について、むやみに反対をしなければ、その問題は、自然に解決されることや、子どものつむじ曲りや片意地の性質は反対や対立的な感情から生じることなど、わかりきったことではあるが、大切な基本問題として熱心に話し合われた。

第四班 創造的経験を通して学ぶ

二百五十人から成るこの班は音楽、美術、演劇など十のグループにわかれた。そのうち、二百人程は実地見学のため、各幼稚園、保育園、小学校へ出かけた。各グル

ープでは討議をしたり、デモンストレーションを併用したりした。

この班の中で、各グループのとり上げた専門科目はそれぞれ異っていたが、第一に子どもの創造性を培うことが大切であるという点に関しては一致点を見出した。すなわち、創造性とは個性に関する事柄であるから、環境が非常に大切であること、そして各児童が、各自の方法により、各自の創造性を培うことができるような環境が強く要望された。しかも、この環境の中で、もっとも大切なものは教師であるとされた。教師は、子どもたちの製作したものが、どのようなものであろうと、その実意図を暖かく受入れる人間でなければならぬ。反対に、子どもたちの言うことを受けつけない環境は創造性をばむものである点が強調された。

グループの中には教師たちが、実際に絵をかいたり、リズムをしたり、演劇をしたりして、子どもたちに実際させたいと思うような、なまの経験を教師自らがしてみ、

非常にためになったと言う報告があった。教えることしかできない教師たちは、もっとこういう経験を持つことが大切であろう。こういう経験すらないとすれば、どうして子どもたちを理解して、その創造性を引き出すようなことができようか。

学校訪問はロスアンゼルス市中の学校であった。はじめに学校のことに關して、一通りの紹介があり、あとは各自興味のある年齢層を選んで、自由に見学して廻った。全体から見て、学校訪問は大変貴重であった。あるグループは訪問する学校の校長や園長も、このACEIの研究グループに加わるべきであると言った。

第四日目には「教育のための新しき展開」という題のもとに四つのディスカッショングループが会を開いた。

第一のグループ

今から四十三年後の紀元二、〇〇〇年は、現在の小学校一年生が、五十才になっているときである。このグループでは、社会学、建築学、人類学の権威者をパネルに

招き、未来の教育界について考えようとした。

形式の固定した教育法の行われた一九二〇年頃にくらべると、現今の学校は、子ども

の欲求というものに重点をおいている時代である。こういう観点から、将来の学校は、もっと拡大したスペースを持った校舎や校庭が考えられよう。最低十エーカー位。

(注エーカーは四〇四六、八平方米)教室は年齢別により大きさを変える。学年別というような分け方はなくなる。校庭にはジャングルの森になぞらえたものや、占星学の陳列物や世界中の時間を知らせる時計などがおかれる。

文明の進歩するにつれて、オートメーション時代がますますさかんになる。このため、従来とは異った問題が起ってくる。すなわち便利すぎる生活から出て来る余暇の利用、文化の遅滞、個人の集団の間の関係、過度の民族優越感、自己満足感などが問題としてあげられた。そして、米國独特の悩みであろうが、いかにして他國人への思

いやりを育てることができるとかという問題を真剣に考え合った。

第二のグループ

このグループもパネルを行った。精神病患者、人類学者、技術者の三人の指導者は、それぞれ、自分の専門の立場から教育という問題を観察した。

技術者は、もっと子どもの興味を科学に向けなければならないこと、そして、その際、科学の基本的な勉強にとどまらないで、これらのものと人間性との関連について教育する必要があると指摘した。

人類学者は、学校の先生たちが、もっと人類学の中でも、文化的なものについて勉強する必要があると強調した。人間の生活様式や考え方がわかってくると、人間というものに対して、理解が深まっていく、それと同時に、そういうわけで、どのように世界の人々のくらし方が、変わりつつあるかという事実を知ることが大切であると説いた。

精神病理学者は、現代において、もっと

も大切な哲学的研究は、このような個人を無視する時代にあつて、いかにして人間が所属感を得られるかという問題であると述べた。創造性を持ち、自由を持つことができるように、学校はもっと、子どもたちに、所属感を与えなければならないというのである。

三人の専門家たちは、専門の立場は異っていたが、期せずして、人間性をつくる——創造性を養うという、同じ目標に焦点が向けられた。

第三のグループ

まず司会者が、この複雑な世代にあつて、個々の子どもの姿に目をとめる必要があることを話した。パネルの指導者の一人は、ある補導所の監督者であつた。彼は夥しい移民の入国につれて、経済的にも、精神的にも、不安な家庭生活を送っている者が多いが、その中でも、補導所に委託される者のうち六十二パーセントは両親の間の関係が不満足であることについて話した。

このグループでは、個々の子どもの持つ

問題を発見し、その指導に当るのはいったい誰かという問題について議論がわいた。

それは受持教師か、または、相談所の先生か、ということまで議論が分れたが、しかし、現在の教師養成を行っている大学の卒業生の状態では不十分であるという点で一致した。また大学の四年の間にもっと精神衛生や心理学の勉強が必要である点もあげられた。

第四のグループ

このグループにおいても、子どもは性来好奇心をもっているにもかかわらず、画一的な学校教育が、この芽をそこない、子どもの創造性が失われてしまうことが指摘された。そして、教師は子ども一人一人の発達のテンポに合わせて指導していくことの必要が強調された。

また、子どもの学習に当って、教師の情緒的な面がひじょうに大きな影響を与える事実を考える時にもっと優秀な教師を教育しなければならぬこと、また加えて、養成に当る大学はもっと精神衛生の研究をと

り上げてほしいという声があつても高かつた。

子どもの創造性をばむものとして、クラスの人数が多い点が問題となり、一組三十五人から四十人を、二十人から二十五人程度にする必要があるといわれた。

第四日目の夜は、「国際の夕べ」が催された。オーストラリア、ブラジル、英国、エチオピア、南アフリカ、^泰泰、ウルガイなどから来た教師や留学生、代表者たちが、各国の服装をつけて壇の上に列んだ。その夜マーシャル・ブランで有名なポール、 Hoffman 氏が講演を行った。

「……アメリカ国民の中に、外国援助を減額せよという声があるが、それは、まったく時代おくれである第二次世界大戦以後十八か国の新しい国々が独立を宣言し、政治的自由、飢餓からの救いと、健康保証とを求めてきた。今や、物質的な援助のみならず、それにもまして知的精神的援助を求めている。……」

ホ氏は米国はこうした国々を援助しない

ではいられない立場に到達しているわけを説明し、共存共栄の理を説いた。

第五日目は地方別に分け、朝食を共にして、食後各地方における活動に関して報告の交換などがあつた。その他、支部会や、各種の委員会、学生部会、また中学校、小学校、幼稚園、ナースリーなどの会があつた。

最後の夜は、カリフォルニア・ナイトと称して親ほくの夜がくりひろげられた。食卓の装飾にも加州の特色を盛り、ロスの小学校の子どもたちが造ったという大きなかごには豊富な果物が美しく飾られてあつた。歌や、面白い話しや、ユーゴスラビヤや日本人のダンスなどがあり、研究や討議に疲れた人々はこれらの余興を見て、楽しい一夕を過した。土地の小学生も多数出演した。

以上、ACEIの機関誌をたよりにして、六日間にわたる研究大会の多彩なプログラムを省述したが、この報告はごく部分的なものであることを記しておく。

(東洋英和短大助教授)